

時間

停止

クンニ

!!!!!!!

天才科学者が好きアピしてくるので塩対応してたら
時間止められてクンニされまくりました

@尾野マト

五階の資料庫へファイル整理に向かう途中だった。

「ねーねー、今夜って空いてるー？♡」

「うう、またいつものが始まったか……」

書類を抱きかかえた私は、目を合わさないようにしてエレベーターに乗り込んだ。

「もー、照れなくても大丈夫だってば♪ じゃ、明日の夜は♡？」

しかし、ドアが閉まる前に彼もすかさず乗り込んでくる。

かえって密室に二人きりになってしまい、私はたった一平方メートル程のその狭い空間の中で、やむなく右端ぎりぎりに寄る羽目になった。ああ、彼がつけているハイブランドの香水が仄かに香って癩に障る。

「ねー、聞いている？ 明日の夜はどうってば？ 食事、行こうよー♡」

「……はー、だから言ってるでしょ。個人的なお誘いは受けませんって」

私は意を決して言葉を発した。

「えーなんでえ！」

「だから、なんででもです！」

いつもいつもこうやって仕事中に絡まれて、はつきり言って迷惑だった。

入社早々「この最低ドクズ野郎！」と蹴飛ばして以来、どういうわけか気に入られてしまっているのだが、どれだけアピールされようともこんな変人男、絶対にお断りである。

——私はこの某外資系メーカーに入社して三か月のしがない技術者である。そして彼・及川啓斗（おいかわあきと）は、我が社きつての天才開発者であり、世界的にも有名な科学者であった。大学時代に彼の論文を読んだ私は、その並外れた脳から生み出されたアイデアと人類の財産とも言える研究成果に惚れ込んでこの会社に入社したのだった。

が、いざ彼と会い、彼の人となりに触れていくなり、そのマッドサイエンティストぶりに幻滅した。

及川は、立体映像をフリックする技術を開発する傍ら、どう考えてもモラル的にアウトだろうという研究に勤しんでいた。しかも、会社の経費を無断で注ぎ込んで。

一、死者の脳に微粒な電気を流し、記憶や思考を得る研究。

彼曰く、当該研究が成功すれば人間は永遠でも生きられるとのことであるが、そもそも生命の死は厳粛であり、軽々と科学が踏み入っていい領域ではないと私は思う。例えば百歩譲って偉大な科学者や指導者の脳を後世に役立てる為とかならまだギリ理解できなくもないが、及川は「脳みそだけの姿で生かされてしまう人間の絶望を見たい」などとのたまう始末。それに、奴は脳を手に入れる為ならなりふり構わず、社員の家族の訃報を聞きつけては「お前のとこの父親（時には母親）の脳みそくれ！」と騒ぐのはまだ可愛い方で、病院の霊安室に勝手に忍び込んで、どこの誰かも分からない死体から脳を盗

もうとするといった行為すら日常茶飯事だった。しかも、本人は「別に殺してまで取ろうとしてないからいいだろう？」という体たらくなのだ。

二、時を止める研究。無茶苦茶な研究だが、及川なら成功させそうなのが怖い。彼曰く、これを成功させれば、例えば某国がミサイルを飛ばしてきても着弾前に対処可能だと言うが、果たして本当にそんな崇高な目的で開発しているのかは甚だ怪しい。むしろ「成功したら会議中の社長の鼻の穴にマジックペンを突っ込んでやろ♪」などと笑顔で語っているのをよく見かけるし、数日前には「マル秘」と書かれたファイルの表紙に何故か私の名前が小さく記載されているのを見てしまった……。なんか、嫌な予感がする。作動させるには膨大なエネルギーが必要らしく、核融合を起こすべく、なんと数トンのウランまで手に入れていた。いや、それ、完全にアウトだから。

……以上、及川のマッドサイエンティストぶりを表わすエピソードは他にも枚挙にいとまがないのだが、ともかく研究の為ならどんな蛮行も辞さないという姿勢と、そうまでして成功させたい割に開発目的がくだらないのがあり得なかった。いずれも人類の未来を大きく左右する研究であるが、奴はこれらが成功した場合に人類がどうなるかなんて全く考えちゃいないだろう。

入社して二日目のあの日、及川の助手に配属された私は、「これ、ゴリラの脳みそ買うのに使った経費なんだけど、ハードディスク買ったってことにし」といってと言われ、「無理です」と断った。それからにわかには口論となり、「脳みそは諦めてください」「嫌だ」のやりとりの末、最終的に「じゃあお前の母親が死んだらお通夜で脳みそえぐりとしてやる！」という暴言をぶちまければ、「最低ドクズ野郎」と蹴り飛ばしたのだった。

3 — 4 — 階数を表示するモニターの表示が「5」に変わる。

くちゅ……くちゅ。

それは、眠くなつたわけでもないのに、突然深い眠りの中に落ちたような、とても不思議な感覚だった。

否、眠りというよりむしろ冬眠のような——もちろん、冬眠した経験なんてないのだけれど——、とにかくもし冬眠から目覚めたばかりはこんな感じだろうかというような、なんとも言えないもどかしい感覚で、なんだか自分が半分だけ存在して半分は凍結してしまったかのようなようだった。

(ん……っ？　なんか体が動かない……それに変な音が聞こえる……)

私の目の前にあるのは確かにエクセルのグラフ。

くちゅくちゅ……じゅ……っ♡れろれろ……♡

(え……？　なんか……あそこがぬるぬるする……)

くち。くちゅくちゅ……。

(あれ？ 確認しようと思ったのに、なんでだろ……体が、動かない……)
あそこがむずむずするから塩梅良く座りなおそうと思ったのに、まるで凍
ってしまったかのように手足が動かなかった。

にゆるっっ♡♡♡

(！)

と、そのときようやく、何か柔らかいものが私のクリトリスにまとわりつ
ていることに気が付いた。

(やだっ、なにこれ♡?!)

っんっん♡くりくり♡にゆるにゆるにゆるにゆる♡

小さな花芽の先端を潰すようにして、何か軟体動物のようなものが動いて
いる。忙しなく柔軟にヌルヌル動いたかと思えば、次の瞬間、少し硬さを帯
び、弾くようにクリをピンピン♡刺激してくる。

にゆるにゆる♡ぴんぴんぴんぴんぴん♡

(ひゃんっ♡やめっ……♡何これ…、何よっ、まさか……パンツの中に虫でも入ったって言うの……?)

しかし、確認しようにも目すら動かせなかった。もちろん、瞬きをすることも不可能だ。

何故だか分からないが、私の目玉はまるで磔にされたみたいに、パソコンの画面を凝視したまま動かない。

(なにこれなにこれ、なんで動けないの……っ、クリに、なんか……いる、のに……♡クリ弄られてるのに♡ひゃん……っ♡)

それに、やめてと言おうとしても声も出なかった。

ぬちゅ…♡ぴちゅぴちゅ♡れろれろれろ♡

(~~~~~……っ!!♡♡♡)

クリトリスを執拗に弄られて、ピリピリとした甘い快感が私の腰や背を絶

え間なく襲う。

「……おまえが俺の好意を無視するからだ。だから、こうやって体に分からせるしかなかった」

そのとき、聞き馴染みのある声が聞こえた。

(はっ、この声は……っ!?)

「おまえのような優秀な技術者が俺に惚れないわけがないのだが、……誘いに全く乗ってこないからな」

(うそでしょっ、及川さんの声だ……っ!?)

「まったく、素直じゃないからだ。こっちはこんなに真剣なのに」

くりゆくりゆくりゆくりゆ ♡♡

(ひゃんうっ♡)

衝撃的な事実にも、いったん現状を整理しようとしたのだけれど、その間

も執拗なクリトリス責めが止まらなくて思考がかき乱されてしまう。

「ふふ♡処女の割に大きいのは自分で弄ってるからだな？ 全く、寂しいくせに素直にならないよな……まあそんな頑固なところも可愛いんだが……」

（えっ、なに？♡あんっ♡）

適度な硬さを帯びたしなやかで温かいものにびらを優しく開かれ、その間の小さな突起が、適度な摩擦で擦られる。

（くっくっ、クリが、しつこく、湿ったもので弄られて……っ♡なにも考えられなくなっちゃう……♡）

「はは、いつもこんなに真っ赤に充血してるのか？♡全く悪い子だ……いよいよ舐め甲斐がある♡」

そして更なる驚愕の事実が発覚した。

（?! つ、いまこの男、舐め甲斐って言った……っ？ えっっ、この湿った感触って……、もしかして及川さんの……、——し、舌、……な

ツ！ ……やあっ♡そんな、されたらあん…‥…っ♡)

くりくり♡くりゆくりゆくりゆくりゆ♡♡♡♡♡こすこすこす♡

(やだっ、このままじゃ私…‥…ッ！ 声も出ないのに…‥…イツ…‥…、いきそお…‥…♡)

こすこすこすこす♡くりゆくりゆくりゆ♡♡ずろおおお…‥…こりゆこりゆっ♡

(くそっ、なんたる不覚ッ、まさか、おいかわに、おいかわに♡…‥…イカされてしまうなんて…‥…っ♡嫌だっ、イカされてたまるかっ♡…‥…ううう♡♡)

るりるり♡こすこす♡
(あっ、でも、イケそうでイケないっ…‥…こんなのお、…‥…♡もし動けたら顔面にクリ擦りつけてやるのに♡…‥…じゃないっ、かかとおろし食らわしてやるのに！！ なんで…‥…っ、声も出ないし、体も動かないのよお…‥…っ♡！！)

「……………す、素晴らしいぞ……………ッ」

（——え？）

「イイぞッ、イイっ……………♡すこぶるいいっ！！意識があるのか！これは……………これはっ、益々興奮するじゃないかっ♡」

（ハアっ?!）

私が絶句していると、なんとということでしょう、次の瞬間、及川はいよいよ鼻息荒く私のクリトリスにしゃぶりついてきたのだった。

ずろおおおっ♡♡♡♡

（ひゃあああああんッ♡♡♡♡）

「俺に舐められてるのが分かってるんだなっ♡しかし、分かっているながらおそらく手も足も出すことが出来ないっ♡つまり、お前はクリを犯されながらも何も出来ないもどかしさに身を振りつつ、絶えず訪れる快樂地獄に心の中だけでよがり続けることになるのだっ♡」

(ああんっ♡吸い過ぎいいッ♡って、こんの悪趣味野郎おおおっっ！意識があるけど動けない私に好き放題出来るのを喜んでやがるううっ、……って、あっ、そんなシたらあッ♡)

れろれろれろれろ♡じゅろおおおおおっっ♡♡

(んんん ン ンっっ……♡きもち、い、いよおっっ……♡)

益々勢いづいた及川の舌が、私のクリトリスを更に激しく舐め上げ、つついてくる。そして時に吸い上げ、まるで扱くようにちゅぽちゅぽと口内で愛撫する。

じゅぽっ♡じゅぽおっ♡れろれろれろれろ……じゅろおおおおおおお♡♡

(ひゃんっ、手も足も動けないのにいきそおっ♡……っ、こんな変な態勢でイぐうっ♡♡……ううっ、でもやっぱりっ、後ちよつとでイけなひいっ♡)

「はは♡マン汁が濃くなってきたな♡もしかして、絶頂が近かったりするの

インスピレーションが湧くと言われたら、背中がぞくぞくした。及川の発
明の役に立てると思うと、この上なく気分が高揚する。

パンッ、パンッ、パンッ♡ごりゅ、ごりゅ、ごりゅ♡♡♡♡♡♡♡♡

「ひああああん……っ♡♡」

大きくストロークしたかと思えば、ペニスの先端を子宮口に当てた状態の
まま何度も突き上げるように貫かれる。

「どうやら緩急つけると感度が良くなるようだな♡」

「はうっ♡及川さんっ♡あっ、おいか……ッ♡♡じゆるじゆるって又いてか
ら、一気に、おく、ぐりぐりってしゅてくるのっ♡きもちいんっ♡♡」

突かれる度に、尾てい骨から脳天にかけて電流のように快感が駆け抜けてい
く。壮絶な快樂の波にのまれ、とっくに呂律も怪しくなっていた。明日からま
た上司と部下としてケジメをつけて仕事していかなければならないのに、こ
れじゃもう、どんな顔して及川を叱り飛ばしていいか分からない。

「じゃあ、ここはどうだ？♡♡」

ばちゅばちゅん♡ぐりぐりぐりぐりつつ♡♡

次はポルチオから少し手前のGスポットを刺激される。

「ひゃんっ、……そこもしゅきいイイッ♡！！ 上のほおっ、じんじんしる
ツ♡♡」

「ふむ、現時点で判明したお前のいいところは完璧に理解したぞ……インスピレーションが次から次に湧いてくるっ。そうだな、まずは365日24時間いつでも好きな時に刺激できる遠隔操作玩具を作るのはどうだ♡？」

「ひあっ、へ、にゃにっ？♡」

よく聞いていなくて聞き返したら、ぐっと腰を及川の方へ抱き寄せられて、再び最奥を貫かれる。

どちゅっ、どちゅんっ、ずぬっ♡♡♡ぱんぱんぱんっ♡♡

「ああああああんっっ♡♡♡」

更にブラウスを捲られ、ブラジャーを上にはずらされ、繋がった状態で乳首も弄られる。

「あひっ、ちくび、そんなカリカリしたらあっ♡」

カリカリカリカリ♡

「……他にも開発しなくちゃならないものがたくさんあるな……うむ、膣内
が痒くてたまらなくなる媚薬付きの皮膚薬も試してみたいし、そうだな……
いぼいぼ付きの触手が中でうねうね動くなんてのも試してみよう♡」

くりくりくりくり♡

「あひいっ♡くりくりちくびきもちいい♡あ、ちがっ♡そうじゃなくてっ
♡痒いのはヤああっ♡それっ、にっ、しょくしゅよりっ、おちんちんがイイで
す……ッ♡はん♡しよんなっ突いたらあっ♡もう……ッッ、イクうっ♡！
イぐうううっ♡♡♡♡」

ばんばんばんばんばん♡